

緋羅紗三片を目錄に加へたり。是によりてヨヒエ様も喜び、インヂークの會談を許したれば、インヂークは訪問したるに、子息ゲク殿(Gekone外記殿?)出でて彼を歡待し、他の家族も此務に従ひたり。終にヨヒエ様も出で來りて、インヂークに歡迎の辭を述べ、彼の要務につきて至急取計ふ様にすべく、今方に宮中に出づる所なりて出で行き、祕書三右衛門(Sannemon)に命じて使節及隨員を接伴せしめたり。三右衛門は快活の態度にて酒食を饗し、ヨヒエ様の夫人も亦自己の飲料を持出さしめしが、此は梅其他の美果の液なり。彼等はインヂークの子息を見て喜び、彼及妹に贈品を與へ、毎日來邸せよ云へり。

* * * * *

インヂークは厚き饗應を受けたる後、ヨヒエ様の家を辭して歸りしが、彦右衛門の宮殿の指揮長たる勅兵衛殿(Cambe-dome)にて新に長崎奉行代理となりたるもの、街上にインヂークを伴ひ、彼を強ひて誘ひ、第二回の宴を開かんて己が後に従はしめれば、インヂークも此厚意を辭するを得ずして宮殿に行き、日本の習慣に従ひ丁寧の歡迎を受けたり。彼は煙草、茶、酒を勧められ、又價を厭はざる程の美味珍肴を以て饗應せられたり。同時に聲樂、器樂も彼の耳を喜ばせぬ。夜に入りてインヂーク歸舎せしが、隨員中には強烈なる酒に酩酊せる者多かりき。日本人は酒樓を知らざれども、旅客に便宜なる宿を有す。貴族等は自宅にて互に饗應し、而も酔痴れたる時の外は喧嘩をせず。酔ひて眠る者あれば、酔はざる者之を介抱す。

翌日インヂークは二人の通譯を遣してヨヒエ様に饗應の謝辭を陳べ、宮廷に於ける首尾如何を問はしめしが、彼は通譯には特別の回答を與へず、別使をインヂークに遣して、二日の後即ち四月二日にエムペロルに謁見すべき旨を通知せり。是に於てインヂークは荷物を解きて品物調をなし、一行すべて多忙たりし時、蘭人の宿より小銃の射距離以上を隔てぬ處に突然失火起れり。主人は四年に三回の火災に逢ひて、家をも財貨をも失ふことかき嘆息せり。インヂークは直に凡ての貨物を石造の倉庫に移し、窓も戸も粘土を以て塞ぎて、身を脱する覺悟をなし居りしが、穩なる天候なりしを以て、十二戸を燒きたるのみにて鎮火せり。

蘭使インヂーク、エムペロルに謁す インヂークの子息厚遇せらる

エムペロル謁見の日になりしを以て、インヂークは獻品を宮殿に送り、自ら一人のボンヨイスと共に之に従ひ、宮殿の門前に來り警衛室に入り、此處にてヨヒエ様其他の貴紳に逢ひ、一時間ばかり待ち居たり。ヨヒエ様は終に其處を去りしが、直に歸り來りて、インヂークを案内し、廊下を経て警衛室に入り、北條安房守に逢ひたり。彼はインヂークを可憐に取扱ひ、エムペロルの前にての心得を語る中に、使節入るべしとの命令來れり。安房守及ヨヒエ様は未知の宮内官に前行して、インヂークを獻上品の處に案内せり。獻上品は秩序を整へてエムペロルの前に置かれたり。インヂークは跪き、彼を案内せる三人も其背後に伏せり。次に閣員インシエンの同胞松平ビーセク様(Matsudero Biescusama)、「オランダ・カピテン」(Hollanda Capitein)の如く呼ばば、インヂークやがて地より頭を擡げたるが、エムペロルの高き座蒲團の上に座するを見るに先ち、其背後よりヨヒエ様彼の背を打てり。是れ未だ頭を擡ぐるの許可を得たるにあらず云ふ合圖なりき。

暫く經ちてインヂークは身を起して侍衛室に退出するこゝを命ぜられたり。此處に多くの宮内官等來りて、エムペロルに謁見したる祝賀をインヂークに述べたり。彼等は退出せんとして身を轉じたる時、恰も一人の紳士來りて、使節の子息の手を執りて、通譯八左衛門及商人ニコラス・デ・ロイ(Nicholas de Roy)と共に、インヂークがエムペロルに敬意を

表したる處に導きたり。此處には閣員は尙退かず在りて、インヂークの小兒の年齢、生地、姓名を問ひしに、少年は六年半にして、暹羅にて生れ、ガレット(Garret)といふ名なりと答へたり。少年は立派なる座蒲團を見て、エムペロルは時々其處に座らずやと通譯に問へり。之を見て閣員は通譯に對し、少年が何を云へるかと問ひしに、八左衛門之を通譯したれば、閣員は嘆賞せり。彼等は又小兒が鍍金せる家及エムペロルの座席の上の立派なる天井を交互に諦視し居るを見て、小兒の手を執りてエムペロルの室内を伴ひ歩行き、終りて之を父に返せり。是に於てインヂークは退出を許されたり。

インヂークは是より二日を費して四閣僚及他の身分ある人に贈るべき獻品の分配を畢へ、又多くの訪問客を受けて之と語り、テント酒、ブランデーなどを以て接待し、頗る多忙に日を送りたり。訪問者の中に彦右衛門の子もあり、彼は兵士二百人の指揮官を伴ひしが、其人は膝に火傷をなしたるを以て、蘭醫は膏藥を張り、又彼の息子が恰も久しく耳痛を患へ居りしを以て、之には油をさしたり。故シクンゴ殿の祕書は主人の生前に註文せし二個の地球儀を持ち行けり。

インヂーク再び宮廷に行く 賜品を受く

四月十日インヂークは再び宮中に出でぬ。エムペロルよりの下賜品を受け、出發の許可を得んが爲なり。警衛室に待つこゝに一時間許りにして、安房守及ヨヒエ様は使節を莊嚴なる一室に導きたり。此室にては四人の閣員隔壁を後にして座し居れり。酒井雅樂様(Sacaja Outusanna)右に座し、次にイシエン(Isien)ボンゲ(Bonge)及モニ様(Monsamma)の順序なり。首班たる雅樂様(Outusanna)は次の如く云へり、蘭使よ、葡人は此帝國に對して企つる所ありや否や。之を卿より聞くこゝを得ば、エムペロルも満足に思はるこゝは、卿の知る所なるべし。之に反して支那船の貿易が貴

國の人民によりて妨害せらるるは、エムペロルの意に忤へり。インヂーク之に答へて曰く、貴閣員は蘭人の忠實を疑ふの要なし。蘭人は日本人の好意を保持せんが爲には如何なる事をもなすべし。彼等は到る處に人を遣はして葡人の舉動を偵察するこゝを怠らず。若し彼等聊にても日本に對して異圖を懐くを聞かば、之を長崎奉行に報告すべし。又東印度貿易の指揮者は、何人も支那戎克を妨碍すべからず、若し犯す者あらば嚴罰に處すべきこゝを布令せり。此くてインヂークは一たび退去を命ぜられしが、再び呼入れられたり。雅樂様問ひて曰く、バタヴィア、臺灣、日本の間に、海上に於て、又は島に於て、或は大陸に於て、何れの時にても葡人に遇ふこゝあらば、支那人の通報するに先ちて長崎奉行に報告するこゝを約束すべきか。インヂーク答へて、力の及ぶ限り之を行ふべしと云へり。彼は再び退出を命ぜられしが、又呼還されたるに、彼はエムペロルの上衣三十着、奇なる蠟塗の板の上に在るを見て、其前に俯伏せり。其時ヨヒエ様曰く、蘭使よ、卿の獻上品はエムペロル之を嘉納せられたり。故にエムペロルは其返禮として此上衣を下賜せられ、且卿の長崎に退去するこゝを許可せられたり。

斯く云はれたる時、インヂークは安房守に教へられて上衣の方に這寄り、其中の一枚の裾を頭上に頂き、謝禮を述べて退出せり。上衣は三個の箱に納められ、蘭人の旅館に送届けられたり。インヂークは凡ての貴紳を回訪し、諸邸に於て蒙りたる恩恵を謝せしが、安房守は在邸せざりしを以て、祕書に面會して、インヂークの名に於て彼は閣下が至急に事を運ばれしこゝを感謝すこの旨を閣下に傳達ありたしと述べ置けり。祕書は安房守の歸邸を待ちて之を告ぐるや、間もなくインヂークに上衣三着を送り來り、且つ自力の及ぶ限り便宜を計らふべしと言ひ添へたり。

此後貴族の家來は屢々蘭使贈遺の返禮として種々の上衣を持參せり。凡て此等をば商人ニコラス・デ・ロイに於て恭しく請取れり。此間にインヂークは諸邸に告別に廻り、子息は二回雅樂様の邸に赴きたり。雅樂様は小兒を取りて膝に

載せ、多くの貴紳の前にて彼に食物を與へなごせり。
 インヂークは旅行の準備をなせり。今や告別すべきは淺草(Asakusa)の寺の主僧を餘すのみなれり。此僧は閣員の首席太田備中様(Ota Beichusamma)の同胞なるが故に、其意を損ぜぬやうにする必要あり。此僧はインヂークが他の歐洲品の贈物の外に精巧なる木製の船を贈りたるを大に喜び、後には之を寺内に掲げて蘭人の紀念品とせり。彼は盛宴を開きて蘭使を饗し、仔細に寺中を案内して日本宗教の秘物を示したり。尙返禮としては絹の上衣及銀五枚を彼に贈りたり。

最後にインヂークは安房守に數個の奇巧なる硝子器を贈り、面謁して告別したし言ひ入れしに、安房守は贈物を受け、人をして言はしむるやう、平常ならば邸内にて彼を歡待せずには置かね得なれども、今日は貴紳の來客を刻々豫期し居るが故に、貴下の幸福なる旅行を祈るべき寸暇も無しとて、面會を謝したれば、即ち其邸を辭して歸り、宿の主人に食費、宿料、倉敷料などの計算を請ひて、仕拂を了せり。主人は四年間に三度焼失せし家屋を再建し諸設備を整ふる爲に、一千テールを利息付にて借用したし談せしかも、インヂークは之を謝絶して曰く、此旅行は物資の不足の爲に巨額の費用を要すべく、如何にせば自身の必要を充たし得べきかを知らざる程なりといへり。但し彼の好意を謝する意にて、染損じの毛織物三段を與へたり。

江戸を出發す

インヂークは至極の歡待を受けたる後、四月十五日江戸を出發せり。宿の主人に川崎まで見送られ、それより戸塚、小田原、金谷、濱名に宿泊し、南海の入江を渡りて新居に抵り、アッコサキ(Accosaki)及ミアコ(Miaco)に宿せり。ミアコにては新しき旅舎にて歡迎せられぬ。此處に夜半まで停りしが、水淺くして渡船を行る能はざりき。やがて貨物、

馬匹を舟に載せ、黎明前二時間に桑名に達せり。此くて四月二十五日には都に着したり。

火山シウルプラマ

此市を離るるこミハリグ、大湖の近くに有名なる火山シウルプラマ(Siurpama)あり。後に蘭使セルデレ(Seldere)之を視察したり。山は非常に高くして、火煙を吐き、煙は風の方に隨ひて方向を變じ、激甚の勢を以て吹きつけ、其近隣の地は晝間も暗く、人畜の窒息を來すこミあり。

此山に隣して尙一の山あり。されど前者の如くには高からず。硫黄は三箇の流をなして流れ出づ。時には溢れて大なる音響をなして谷に流れ入り、又谷に滿つる時は他の流口を求めて大なる岩石を洗流すこミあり。此等の三流は長さ一哩半、幅は尙之よりも廣く、曠野を流れて下る。山の近傍は甚だ熱くして、何人も久しく立つを得ず、動もすれば足を火傷すべし。

* * * * *

インヂーク都に着す

インヂークは此シウルプラマを左方に見て、四月二十五日都に來れり。旅宿の主人は彼の歸着を牧野佐渡様に報ぜしを以て、佐渡様はインヂークに絹布の上衣を贈り、出發の許可を與へたり。其後インヂークは旅舎の主人に伴はれて喜劇の見物に行きしが、場内の客は清潔にして規則正しかりき。俳優は立派なる服装をなして巧に演じ、をさく歐洲の喜劇俳優にも劣らじみ見えたり。若し日本語を解したらんには、歐洲の俳優よりも一層巧なるものも斷せしならん。インヂークは日本の絹上衣百枚を東印度會社の爲に保管せんこミを主人に托し、大佛其他の堂宇を見て都を去り、伏見に一泊し、舟にて大阪に赴けり。

宿の主人は友人及僕を多数に率ゐて二隻の遊船に分乗し、蘭貨を載せたる船の碇泊せる大阪川の河口、まで送りて出でたり。風は西より吹きて帆を張る能はざりき。遊船は船の兩側に止まり、人々は船中に來り、携へ來れる日本酒を飲みて使節の出發を祝ひたり。

日本の温泉

五月三日大阪を發し、十一日に下關を経て小倉に着し、此處に一泊して人馬を飢ひ、陸路豊後を経て長崎に向ひぬ。十四日オリスモ(Osimo)に來りて温泉に浴せり。温泉は立派なる屋根を以て蔽ひ、湯は一方なる熱流より銅の嘴管を通して浴槽に入り來る。其熱度は指を入れば火傷する程なり。然れども同じ流れの他方は非常に冷にして、寒熱兩流同一の河床を流る。是れ自然の祕密なり。浴湯を準備するには、湯場の主人先づ熱湯を注ぎ入れ、次に冷水を混じて入浴者の要する温度にす。

* * * * *

インヂークは此オリスモの奇なる温泉に浴して快哉を叫びたる後、又旅行を續けしが、博多及肥前にては同地の君主は人馬を供給し、市街を清掃して一行を歓迎し、ウネワリメット(Unewarime)の領主は市外に出迎へて使節を導きたり。第一列には日本兵士五人進み、次に領主は旗を手にして騎馬にて來る。之に次ぎてエムペロルの監督官並に警固士長き棒に附けたる二本の傘を各三人の手にてさしかけられて來れり。次に車三輛、其兩側には日本の歩騎兵警固す。其中央には蘭使の輿あり。

ウネワリメットの記載

ウネワリメットは小き市にして、魚族の多く棲息するドニ(Dony)河の上、樹木繁茂せる山の傾斜地に在り。河は市の



尾張市(名古屋)

The City Unewarime with the Castle.

- 1. The Castle.
- 2. The city.
- 3. Stone bridge.
- 4. Buildings of the Unewarime.
- 5. The Governor's house.
- 6. The Governor.
- 7. Commemorative grounds.
- 8. Captain's house.

城壁の大部分を洗ふ。城壁には多数の方形堡あり、且高き樹木を栽えたるが、壁上より現れて水に映す。河は市の前
の入江に注ぐ。流急にして石橋の下を朝鮮海に入る。市の對岸、橋の一方に税關あり、河を上下する船は停止して關税
を拂ふ。之を拒めば直ちに死に處せらる。橋は岬に終る。此岬の兩側は河に洗はる。此を経て市に入るなり。街衢の
中には岩の麓に沿ふものあり、その岩に切られたる階段を上れば、城に達す。城壁、城樓は遠くより望むべし。城樓
の最も高きは五層なり。城の一方よりは稻田のつづく盆地を見るべく、一方よりは樹木鬱蒼たる諸山を望むべし。

長崎に歸着す

五月十六日インヂークは無事長崎に歸り、出島なる東印度會社の役員の健康なるを見たり。後間もなく望樓より長崎奉
行に二隻の船の見えたるこゝを報告せり。依りてインヂークは船を派遣するの許可を得て、エルネスト・ホーヘンホック
に三隻のスループ船を引率せしめしが、彼の二隻は長崎に来るべきフリゲート船グラヴェランド(Graveland)及フライ
ボート・デ・ヴィンケ(Vinke)の二隻なりき。一船は一六六一年五月十八日附の書翰を持參せり。ゼランディア堡(Zelandia)
にて認められしものにて、フレデリック・コイェット(Frederick Coyet)外三名の署名あり。書中の要領次の如し。

國姓爺に關するコイェットの書翰 支那人ゼランディア城を攻む

國姓爺(Coxenga)は船三百隻に多数の兵士を載せ、ラケモニア海峡を経て來り、四月十九日臺灣に上陸し、直に全島を
征服せり。プロヴィンシア堡(Fort Provincia)は支那人の第一撃に降伏し、臺灣在留の蘭人は虐殺に遇へり。ゼランデ
ア城に近き市は處々灰燼となり、全部掠奪せられ、ゼランディア城は包圍せられぬ。フリゲートヘクトル號(Hector)は
數隻の戎克と戦ひたる後自爆せしが、救命せられしもの一人もなし。グラヴェランド及メーリーの二隻は國姓爺の海
軍と戦ふの力無くて脱走せり。ケラング(Kelang)より此方に來れるデ・ヴィンケ(de Vinke)及イムメンボルネ(Jimmer-

home)の二隻は、食料缺乏するか或は敵に迫られて再び洋中に出でんには、日本に赴くべし。そは貴下が我が援助に必要なりとて送り得る凡てのもの、即ち米、雜穀、日本酒の如きものを載せ來らんが爲にして、我が城中は漸次缺乏に近づけるが故なり云々。

インヂークは直に通譯によりて此悲報を長崎奉行に通知せしが、グラヴェランド及デ・ヴィンケの二船は此時出島の前方に碇泊せり。奉行は臺灣の事件を筆記して送らんことを希望せり。インヂークは事變の真相を知らんが爲に、新着船の船長其他を集めて之を聴取れり。

インヂークは戦況につき一層詳細のこゝを明め、且つグラヴェランド號は國姓爺の襲撃を豫期せるケラングに六月十三日回航し、同地に於て七日間に爲し得る限りを積込み、避難民をも收容し來りしこゝを知りたり。

臺灣の事情を日本文に譯して江戸に申送る

是に於てインヂークは次の如き顛末を日本文に譯して、長崎奉行に致せり。曰く、國姓爺は九年以上も臺灣に住めるタヨファン人及び支那人と牒し合せて、蘭人よりゼランディア城を奪はんことを企てしが、此陰謀は露顯して、謀叛人は處刑せられぬ。後支那人はファイエット(Fayett)の指揮の下に、不意にゼランディアを襲ひしが成功せず、却つて被攻圍者の爲に殆ど斃殺せられ、國姓爺の許には此報を齎す者も無く、ファイエットも戦死せり。捕虜の言ふ所によれば、彼等は國姓爺に従属せるものなり。然るに國姓爺は此失敗に懲りずして、猶従前の計畫を捨てざりしかば、コイエットは之を聞知して警戒を怠らざりき。殊に東印度會社其他に多額の負債を有せる支那の大貿易家ピネカ(Pincka)と云ふもの脱走したるが、彼は臺灣全島の事情に精通せる者なれば、ゼランディアの内情を國姓爺に語るの危険もあり。而して多年來機會を窺へる國姓爺が、此機を利用して目的を遂げんことをは想像するに餘りあれば、コイエットの苦心は小

少なからざりき。此疑念を益々深くならしめたるは、國姓爺が多數の兵士を集めて臺灣征服の爲に艦隊を準備すとの報諸方より傳はりしことなり。コイエットは此事情を十分に知りたれば、支那或克を以て一書を國姓爺に送りて、何の爲に戦備を修むるか、其目的を聞きましと申送れり。國姓爺は巧に其問を避けて、斯くの如き風説をなすものを信ずること無く、之を囚へ拷問して眞實を吐かしめよと云へり。而して尙彼の目的を隠蔽するが爲に、屢々三三十隻の或克に物貨を積みてタヨファンに來らしめたり。然れどもコイエットは事情をバタヴィアに具申したれば、バタヴィアよりは戦艦十三隻を援助の爲に急派し、九月中旬ゼランディアの前に碇泊せり。コイエットは其中三隻を國姓爺の方に派出して其動靜を探らしめたり。國姓爺は此三艦を歓迎し、彼は東印度會社に好意を有し居れば、コイエットも之を信ぜよと云ひたり。コイエットは此當りよき態度に欺かれ、總ての報告を詐なりきと信じて、艦隊を他に遣し、残れるは二隻の大艦及同数の小艦のみなりき。國姓爺は艦隊がゼランディアを發したるの報を得るや、直に或克三百隻に四千の兵士を載せて臺灣に來らしめたり。此或克は夜間ラクモニア(Lakemonia)海峡を過ぎ、翌朝多數の兵士を臺灣に上陸せしめ、ゼランディア及フォルモサの二城を圍めり。是に於てコイエットは兵三百を遣して其上陸を阻止せしめしが、彼等は直に包圍せられ、最後の一人まで戦ひて、支那人を成るべく多く殺して其身も斃るるに過ぎざりき。敵は新增援を得てフォルモサ城と相對するプロヴィンシア(Provincia)城を襲へり。城は力弱く、此くの如き強敵に久しく當るべくもあらざりき。五月五日敵はゼランディア城の前の市を劫掠して之を焼けり。タヨファンの前に残りし四隻中の最大なるをヘクトルと云ひしが、此は百人の乗組と共に爆破せられぬ。クッチ船メーリー號は大速力を出してバタヴィアに走り、他の二隻は即ちグラヴェランド及デ・ヴィンケなるが、ケラングに向ひて同地に戦況を傳へ、再びゼランディアに歸り、海岸を航行したれども、終に長崎に來れり。尙商人レーニウス(Loening)の言ふ所によれば、彼が其地を出發する

時には、ゼランディアは未だ落城せざりき。

長崎奉行は直に此顛末書を江戸なるエムペロルに送り。其使者の江戸に至る途中に在る時、一の戎克、帆船及橋より青色の旗を翻して出島の前に投錨せり。其船長たる支那人の奉行の許に來りて語る所によれば、國姓爺はタヨファンに在り、臺灣全島を領し、攻圍せられし百四十人の兵はゼランディアより突出せしが、彼の破る所となり、身を以て脱せしもの僅に七人のみ。彼は蘭船三隻を焼き、二隻を海岸より追へり。又彼がアンヘイ (Anhai) を出發してより十日の間に、新銳の兵士は國姓爺の軍隊を増援する爲にタヨファンに送遣せらるべし。

インヂーク支那戎克捕獲の允許を得んこと

是に於てインヂークは奉行彦右衛門殿に對し、書翰を以て言ふやう、國姓爺は東印度會社に信無き行爲を爲し、不意に彼等を攻撃したれば、海上其他に於て出會する國姓爺附屬の支那戎克を捕獲するの許可を得んことを請ふ。彦右衛門は之に答へて曰く、自分は斯くの如き重大なる事件を專斷するを得ず、エムペロルの宮中より出づる回答を待たざるべからず。然れどもエムペロルは對日本の支那の貿易が聊かたりとも妨礙せらるることを好まれざるべしと考ふ。又日本は豊富なる貨物を失ふを欲せず、殊に支那の供給する藥品は之を失ふを欲せざるなり。若し蘭人にして國姓爺に復讐せんことを欲せば、臺灣に於て之を爲すべし。日本に來る貿易船の海上に於て妨礙せらるることを欲せず。

インヂークの決答

インヂークは彦右衛門に次の如き回答を送れり。曰く、我等は公敵に對して加へ得る限りの損害を考ふるものにして、是れ國際法の許す所なり。江戸政府莫くは之を惡意に解すること無からんことを。東印度會社は到る處にて國姓爺の爲に慘敗しつつあるに、蘭人之に復讐するを得ざるか。國姓爺の戎克を差押ふるは、バタヴィア政廳の命令に従ひて之を爲さざるべからず。日本人は之を惡しく取らるる筈無し。何となれば廣東及南京の戎克は多數の支那貨物を日本に輸入すべきが故に、國姓爺の戎克來らずとも事は足るべし。又彼等にして日本の貿易が和蘭の軍艦によりて妨礙せらるることを知らば、疑もなく國姓爺を背き韃靼に服するに至るべきなり。かくて彦右衛門の臺灣事件の報告をインヂークの國姓爺所屬の戎克捕獲請求は書面にて江戸に言ひ送られしが、其ままた一時は經過することになりぬ。

其中に望樓より二隻の船の着したることを報告し來れり。發見せられたる船はゴレット (Golet)、ヂーメルメール (Dijmermeer) の二隻にして、バタヴィアより貨物を滿載し來れるものなり。次でインヂークの後任者デリック・ヴァン・リエル (Derick van Lier) を乗せたるブイエントケルク號 (Buyenkerk) も來るべしとの報ありしが、此も亦やがて船影をあらはし、暫時にして三隻も出島の前に投錨せり。インヂークは銅商の申出でたる銅價の騰貴に同意せり。米の少きが爲に鑛夫の生活費高くなりし故なりといふ。支那戎克にして國姓爺に屬せざるもの折々長崎に來りしが、支那、暹羅、其他に在任せる和蘭總督の證明書を持來らざるは無かりき。

ヘルマン・クレンクの冒險

此後一蘭船長崎に着せり。その掲揚せる旗によりて上官の便乗せることを知りたれば、インヂークは小艇に乗り其船に赴けり。船中にはヘルマン・クレンク卿 (Herman Klink) あり。コイエットの後任にして臺灣總督となりて赴任せんとするものなり。クレンクの言によれば、一六六一年六月二十二日バタヴィアを拔錨せしが、同じく出發したる臺灣總

督代理ヤコブ・カセンブロード (Jacob Casenbrood) を乗せたるロルチン號 (Lornen) が第一日に相失せり。それより一葡船を發見して之を捕獲せしに、同船は凡百二十噸の大きにして、東甫塞より媽港に航する途中にあり、船長をルウィス・バレット・レチル (Lewis Barret Leneil) と云へるが、シヤムバ (Siampa) 附近にて蘭船に追付かれ、一彈をも發せずして船並に載貨を差出ししかば、クレンクは該船より最上の貨物及葡人十七名を我船に取り、支那人七名及黑人十一名を元船に居らしめたり。其後クレンクは金獅島 (Golden Lyons Island) の前に碇錨して食料と水との補給を得、其住民よりフォルモザの憐むべき狀況を聞き、七月三十日臺灣に達せり。然るにコイエットは直に水先案内シツケ・ペテルゾン (Sicke Peterson) を支那船にて派遣し來りて、臺灣に近く停船するときは、二百隻を準備せる國姓爺に拿捕せらるべければ、日本に廻航せよと告げ來れり。クレンクは即ち件の水先案内に印度當局よりの書類を渡し、危険は思ひしかども、之をゼランヂアに持ち行かすめ、葡船を捕獲せし時虜へたる十七人の葡兵も彼と共に遣し、自身はケラングに向ひ、支那人數名をして同地の總督に一書を持行かすめられたるも、回答を得ざりしを以て、日本に向ひて航行を續けたり。然るに途中闇夜に暴風に遇ひて海岸に近く吹付けられ、一時は危険に陥りしかども、天祐によりて之を脱し、八月二十二日長崎に安着せし由なり。奉行彦右衛門殿は其夜臺灣新總督に上陸を許可したり。船中の貨物の大半は海水の爲に損害を被りたりき。

インヂークは彦右衛門殿が大にクレンクを禮遇厚待せしことを通譯より聞き、更に盛なる儀式を以て新臺灣總督を迎へんきて、船中より若干の役員を呼びて蘭簿の人數を増し、甚だしく日本人の視聽を惹けり。

國姓爺の臺灣攻取及伯父殺害の話

爾後和蘭通譯が長崎なる支那の商人より聞く所によれば、國姓爺の伯父サウヤ (Sawya) は臺灣を手に入るべき手段を謀するにこころ久しかりしが、或日之を腹心の友人に語りしに、友人は亦之を國姓爺に語りたり。國姓爺は此計畫を賛し、之を實行せんことを決心せり。然るにサウヤは事志を違ひしを發見せり。そはゼランヂアを攻圍せし爲に兵を失ふこと多く、食料缺乏し、痢へ疫病の流行の爲に支那兵の死亡者日にく多かりしを以てなり、之が爲に内訌起りて、サウヤは潛に數隻の戎克を將るて臺灣を脱走して、國姓爺をして後事を處理せしめんことを圖りしが、發するに先ちて事露れ、國姓爺は激怒に堪へず、是まで功勞ありし伯父なれども、彼を自己の軍隊の多衆の前に牽出して寸断せしめたり。

博多侯インヂークを訪ふ

此報を聞きし後、博多侯は多數の侍臣其他の臣下と共に、グラヴェランド及ホグランド二船を見んが爲に來り、海員が游泳の爲に甲板より水中に躍り込むを見て喜べり。次で出島の蘭人の倉庫に來りし時、インヂークは多數の歐洲の珍品を示し、彼が江戸より長崎に歸る途次侯領を通過せし時に受けたる榮譽に對して感謝せり。それより彼を新總督クレンクの第に案内し、風琴其他の樂器を奏せり。此處にては侯の請求によりて、ルニウス (Loenius)、ブール (Boer) の二夫人を謁見せしめたり。博多侯の去る時、バタヴィアより着せるヴァロンホーレン (Valon hoeren)、ニウボルト (Newport) の二船は禮砲を發せり。翌日侯の使者來りて酒五樽及二個の大なる箱を贈れり。一個の箱には臘肭獸あり、一個は乾したる海扇を入れたり。日本の金工は臘肭獸の骨を粉末にして之を唾液に混じたるものを以て、水銀を被展性となす。又日本人は銀を鍍金する時、臘肭獸の骨粉を以て調和せる水銀を以て銀の表面を洗ふなり。

インヂークは支那戎克がボクロ・カンタコン (Poclo Cantacon) 附近に於て捕獲せられ、風の都合にて長崎に來りたる報告に接せり。此戎克の到着は支那の貿易者をして恐怖を懐かしめたり。然れども彦右衛門殿は之に意を留めざりき。彼は國姓爺の臺灣に於ける陰險なる行爲を聞き居ればなり。此捕獲船には良米四百噸を積み。

平戸、有馬の兩侯蘭人を訪ふ

平戸、有馬兩侯も、多數の隨員と共にインヂーク及クレンクを訪問して歡待を受けしかば、返禮として種々の品を贈れり。捕獲支那船の積荷に關しては、支那人側は此は日本に向けて積み込みたるものなれば、彼等に返附せらるべきものなりと主張せしが、彦右衛門殿はその荷卸しを命じたるに、米以外に硝石百六十四袋、多額の錫及鉛を發見したり。米は確に國姓爺の饑えたる軍隊に給するもの、硝石は火藥製造に供するもの、鉛は彈丸に使用するものにして、日本に輸入の品にはあらざることを明白なれり。

*

*

*

*

*

*

*

彦右衛門殿及インヂークの交話

既にして長崎の高官の一人彦右衛門殿(Sacquemondone)出島の蘭人の倉庫にインヂークを訪問し、クレンクが博多侯に貸したる鞍及手綱を携へ來りて、博多侯は同様のものを所有したきが故に、調製せしめられたしこの意を通じたり。之に匹敵するが如き良品は到底日本人の手にて作り得ざるが故なりと。

インヂークは此使命は唯假託にして、實は支那の戎克を捕獲する蘭人の意志に關して調査せんが爲なりと推察せり。然るに彦右衛門殿はインヂークに云ふやう、予は卿が出島に於て私に相語るべき機會を求め居りしが、今日まで之を得ざりき。今や博多侯は其機會を與へられたり。平戸、有馬、博多諸侯の訪問は蘭人に對する眞の友愛に基づくものにして、蘭人が國姓爺の爲に苦しめらるる不幸を悲しみてなり。此榮譽は東印度會社がエムペロルの宮中に於て甚しく寵遇せらるるこの確實なる證據なり。若しエムペロルにして蘭人に敬意を表せざれば、諸侯の中誰か身を降して蘭人を訪ひ且つ贈品をなす者あらんや。而してインヂークも亦長崎奉行の宮中に於ける勢力、又彼等が蘭人の貿易



の獎勵の爲に表せし慈父の如き傾倒を知らざる筈なし。然るに今や國姓爺と不和を生じ、到る處に支那或克の差押を行はんとせり。然れども卿は江戸にて、エムペロールの名に於て閣僚より、支那船を掠奪し若しくは其貿易を妨ぐべからざることを命令せられたるが故に、其命令に背かば、嫌疑を被ることは免れ難し。今國姓爺と和蘭人との不和を調停すべき方法につきて好き存じ寄りは無きにや。

インヂークはクレンク並にリエルミ同席にて下の如く答へたり。曰く、博多、平戸、有馬の諸侯の訪問及贈遺は東印度會社の榮譽として感謝する所なり。長崎奉行の好意も、之によりて蘭人の希望が宮中に於て採用せらるる事なれば、亦大に之を敬重せり。之を認識せざるは忘恩の最も甚だしきものなり。又江戸に於て蘭人が支那船を捕獲せざることこそを約束せしことをも否定せず。然れども是れ當時蘭人國姓爺が平和状態に在りしことを基礎として約束なり。其後蘭人が一番船及二番船に就きて聞く所によれば、國姓爺は宣戦せず又最小の原因も無くして、四千の兵を以て臺灣を襲ふの不信行爲に出でたれば、事情は全く變化せり。國際公法は凡て武力を以て武力に抵抗することを許せり。此場合には人はその全努力を費して掠奪を行ふことも、悪事を行ひたりとは謂ふべからず。是れ實に對等報復の原則に基くものなり。臺灣の全事情は再度文書に認めて長崎奉行に提出し、奉行は之を江戸に廻送せられたり。是によりて蘭人が國姓爺に對して行ひ得べき凡ての敵對行爲をなすの目的を了知せられたるべく、之が爲に宮廷も遺憾せらるる所あるまじし信ず。何となれば是れ前陳の約束に反するものに非ざるが故なり。國姓爺をして其殘酷なる戦を平和に變ぜしむべき他の方法はあり。是れ既に彦右衛門殿に語れり。若し日本エムペロールの命により現在及今後支那船より捕獲せる貨物、金銭は、國姓爺が蘭人に行ひたる損害に對して十分なる賠償をなすまで、長崎奉行に於て之を保管せられなば、彼は速に媾和するに至るならん。若し此策にしてエムペロールに容れられざらば、尙他に一法あり。

そは蘭國の軍艦がマニラ、南京、日本、其他に於ける彼の貿易を妨害して彼を貧困に陥らしめ、以て構和を強ふるこゝなり。彼の貿易する港が蘭人の爲に封鎖せられたらば、彼の奸惡なる賊も何をか爲し得べき。

作右衛門殿はインヂークの答を聞いて曰く、蘭人は支那船を捕ふる權利を有すれども、エムペロルよりの回答未だ到らず。江戸の宮廷の怒を惹起さざる爲には、今暫く之を忍ばざるべからず。

インヂークは答ふらく、東印度會社は全力を擧げて日本帝國の意を迎へ、且つ之が爲に微力を效さんことを幾慮へり。然れども國姓爺の如き暴惡人に苦しめらるる時、其敵を壓服する方法を講ぜざらば、我等は直に破滅の境に落ちん。敵は小火災の如く初には之を消すこゝ容易なれども、之を捨て置く時は全市街を破壊すべし。敵を捨て置き、漸時有力になりたる時之に復讐せんすれば、時既に遅し。敵の勢非常に猛くなりては、彼は反對者を物の數も思はざるに至らん。若し國姓爺の貨物を満載したる戎克が安全に何等の障礙もなく各地より歸還すまれば、如何にして彼を壓服するを得べきか。彼は之に依りて愈々暴威を逞しくせずや。何人か狂人に劍を與へて自ら殺さるるの愚を爲すものあらんや。

作右衛門殿はインヂークの議論の道理に基けることを認めたり。然れども長崎灣に在る積荷満載の支那戎克につきて疑惑あり。若し蘭人にしてエムペロルの命令を守らずまれば、此船は蘭人の戦利品なるより外の事あるべからず。而して蘭船は非常に多數同處に碇泊し居るなり。インヂークは此疑に關して次の如く解答せり。曰く、蘭船は定りたる日に出帆す。支那船が拔錨する前に蘭船の去ることは確なり。蘭船は何物をも顧みずして直に派遣を命ぜられたる地に向ふ。實際和蘭のフリゲート船が臺灣其他支那の港灣の前を遊弋して、戎克を待つことは之れあり。此は予の責任に屬せざる船のなす所なり。予は長崎に在る船に對するが如くに之に命令することを得ず。

作右衛門殿は此答に満足して、之を長崎奉行に傳へんことを約束せり。而してインヂークに款待を謝して辭し去れり。

其後久しからずしてヨヒエ様は江戸より歸りしかば、インヂークは通譯を遣して之を賀せしめぬ。ヨヒエ様は之を謝して通譯に語りて曰く、予は國姓爺の臺灣に關する隱謀を聞きたれば、蘭船は長崎に於て見るを得ざるかと思ひしに、江戸を出發するに先ち之は反對の話を聞き、今歸りて亦自ら之を實際に目撃したるを喜ぶま云へり。

又彼は九月二十八日に蘭貨を販賣し始むる許可を與へたり。

日本の警邏船七隻は陸に漕ぎ歸り、蘭船九隻及支那の捕獲戎克一隻あるに對して唯三隻を残し置かれしは、惡徴にはあらずと思はれたり。從來は外船一隻につき一隻の警邏船を繋ぎありしなり。

インヂーク長崎奉行を訪ふ

九月二十七日インヂークはクレンク及ヴァン・リエルと共に奉行ヨヒエ様を訪問し、江戸よりの歸任を賀し、又クレンクはバタヴィアより臺灣總督として派遣せられしかば、ゼランヂアに赴くべき路は國姓爺の兵船に塞がれたるを以て、日本に來りたりと告げたり。

ヨヒエ様は江戸に於てインヂークの書ける國姓爺の陰險なる計畫につきての顛末を讀み、臺灣戰爭の好運を望むま云へり。

最後にインヂークは此處に在るヴァン・リエルは己の後任たるべしと告げ、其承認を請へり。ヨヒエ様は之を承認せるのみならず、蘭國の貿易を進歩せしむる爲に己の力の及ぶ限りを爲すべしと約せり。

インヂークが長崎を發してバタヴィアに歸りしは一六六一年なり。

*

*

*

*

*

*

*

此後に於てはヴァン・ゼルデン(Van Zelden)がなしたる長崎より日本エムペロールへの旅行は記述するの價あり。

* * * * *

長崎は高山の間に在りて、山は手際好く壁面をなすが如く切り通され、山に圍まれたる公園の水は何人も之を望むまに用ふるを得。何みなれば人は山を流れ下る水を引入れ、又之を止むるを得べければなり。此點に於て長崎は人工に依る所多けれども、自然に負ふ所は更に多し。其周圍の地味は米、麥、其他各種の植物に適せり。十月頃長崎市民は武装して市内を練り歩行く。各區は特別の組を作りて、其前に凡ての人の使用する武器を運び行く。其儀式頗る盛大なり。何人も火災を恐れて銃を發射せず。兵士は日本人の間に非常に尊敬せらる。彼は襦衣を着て商人の許に赴くに、若し商人手頭ミを地につけて禮せざる時は、商人は必ずしたたかに打たる。然れども最も忌むべきは子殊に女兒を殺す習慣なり。兩親は其生兒を厄介視し、女兒をば藁の束に結び、水に投じて溺死せしむ。男子はエムペロールの官吏に引渡され、官吏は之に軍隊的訓練を施す。

蘭使の江戸に向けて發するや、朝鮮海に於て東北の強風に逢へり。之が爲に船は鹿兒島に着して警標山(Bacon Hill)の前に碇泊せり。此警標は葡人が此地に自由貿易を行ひし時、日本人の承諾を得て初めて建てたるものなり。

大市鹿兒島の記載

鹿兒島は葡人の初めて上陸して日本に足場を得たる地にして、葡人は此地に商館を開きたり。薩摩の王國中此地は之を設くるに便宜よかりしを以てなり。前記の警標は、上は方形にして廻轉球を具へ、太き杉の棒の上に立つ。而して此棒は頂に於て大なる鐵鈎を以て棒に定着せる二本の材木を以て支へらる。高き梯子ありて之にかけられ、上に登り行くべし。此梯子の階段は兩側の外に突出す。下には番小舎あり。他の側には山の傾斜に多くの家建つ。此標を海員は

セリーグの距離に於て見るべし。その立てる岩高ければなり。其麓には漁村ありて、其前に良好の碇泊地あり。

蘭使鹿兒島に入る

葡人は一隻の壯麗なる戎克に乗り、急流の河を溯りて市に入れり。此河は鹿兒島を貫流して朝鮮海に注ぐ。佛國のロオン、洪牙利のドナウも之に比しては流緩なり。葡人の乗れる戎克には二本の櫓あり、其間に天幕あり、恰も六本の柱に支へられたる船室なり。船首には錨二個懸れり。斯くして峻しき高き岩の間を溯航したるが、通過の際觀者をして恐怖せしむるこゝ屢々なりき。

港の中には堅固なる人工の水城あり、現エムペロール將軍(Changon)の祖父大御所が太閤の子息秀頼より覇權を奪はんを企てし時建てたるものミす。鹿兒島は彼に取りて重要な地なりしを以てなり。何みなれば、此市は薩摩の鍵鑰たるのみならず、又豊後(九州)全島の鍵なればなり。此水城は方形にして、海中より砂石を以て積上げ歐洲の堡の如き方形堡數多を有せり。此處には有力なる衛兵配置せられ、船は此處にて關稅を拂ふ。海より作られたる石の作道は、兩側に銅の欄干を具へて、構造の妙を賞嘆すべし。此作道は水城より一個の大なる番小舎に達するものにして、此番小舎の外は壁恰も此作道の上に在り。此小舎は港を見渡すべく、各舎にエムペロールの兵士五百人を屯せしむ。此兵士は絶えず水城の狀況を監視す。薩摩王はエムペロールに抵抗して武器を執り、貢賦を拂はざるこゝ屢々ありて、遂には屈服はすれき、尙時々新なる勇氣を振ひて愈々損害を受くるこゝある程なり。番小舎ミ山ミの間には、市の北側に便利なる港ありて、多くの船停泊す。之に近く市の倉庫あり、水際より上れる石壁の上に立てり。其中央に大なる方形の門あり、砂石の階段ありて港に下る。國姓爺に運ばるる貨物は皆此門に於て陸揚して市内に運ばる。門より北の倉庫ミ番小舎ミの間に河あり、市より流れて港に入る。其河の一方には大なる税關ありて美を盡せり。此處にて船舶は第二回の關

税を拂ふ。其金額はエムペロールに大なる収入を供給す。

死體を洗淨する爲の殿堂

此税關の對岸に寺あり。死人を火葬にする前數日間此處に安置す。之に附屬の僧は、阿彌陀、觀音、其他死者の生前主ら禮拜せし神に納受せらるる爲に、死體を清むる料として巨額の金を得。殊に富者より得る所多し。

*

*

*

*

*

*

*

此寺より遠からず市の方に當りて、防火の用意は、倉庫ありて、薩摩全國の寶物を藏む。而して一年一回エムペロールの兵士來りて之を大阪に運去る。此等水城ミの間に一字の美麗なる殿堂ありて、日々多數の參詣者を牽く。植物、家畜の上に祝福を祈るこゝ、恰も古代の希臘、羅馬人のバン神に於けるが如し。……………

再び鹿兒島の記載

鹿兒島を貫流する河の南側には、市は膨脹して高山の方に走り、大部分は警標の立てる岩の背後に隱る。市の南部に方り中程の處に山あり、其山腹に一寺觀あり。其屋背は凡ての家屋の上に聳え、寺の内部は亦頗る美なり。此處は薩摩王がエムペロールに對して貢物を獻せず、叛逆を謀りたる時、事敗れて僧ミならんが爲に遁逃せし寺なり。東部には處刑場ありて、石壁を以て圍む。

使節が此市に於て休息せし時にも、十一人の日本人及三人の葡人は基督教徒たるの故を以て十字架に釘付にせられて、文火を以て焙り殺されたり。

鹿兒島より西北四リグを距りたる所に高山ありて、頂は雲表に聳ゆ。是れテナリッフ(Tenariff)島のテレイヤ(Tereya)山を除き、世界の最高山とせらる。此山は天に最も近しは俗間一般の説なり。而して火ミ硫黄ミを雲表に吐く。

蘭使は天候の和順にして風の風きたるを見て航海を續け、大村(Umbra)村を過ぎ、同様の天候尙續きたれば茂木(Mon-
by)に達して投錨せり。此處にて各種の食料を得、豊後(Bingo九州の意)の前に碁布せる多數の島嶼の間を航行し、夕方
には七釜(Nanatzamma)に達したり。是より進行稍緩にして、十一日はカメノサキ(Cammenosacci)に投錨せり。此地
の前面に漁夫の多く住せる島あり。此處にて海員は絹の羅衣(つぎ)を出して、針金細工の銀製植木鉢(つぎ)と交換せり。後者の技
術の精巧なる、何れの國に於ても斯くの如きものを作る能はず。又新鮮なる食料品を得たり。

カメノサキには久しく止らずして夜間拔錨し、カムロ(Carro)、ヨレ(Jore)及スワ(Suwa)諸島の間を航して、唐津(Ca-
rois)村に近く投錨せり。是れ日本本岸の南に在る地なり。此地の住民は非常に佳味なる蝗を蘭人に供給せり。蝗は二
千年以上印度人又は東洋人の間に賞翫せらるるものなり。又唐津近傍にて屠りたる牝牛一頭及野羊數頭を得たり。こ
れよりカミナガリ(Caminagari)、ヨコシマ(Yocosima)諸島の附近を航し、タントノミ(Tantonomi)に至れり。日本本州
の海岸の岬に在る繁華の地なり。此處より土佐(Tonsa)に渡るべく、エムペロールの税關ありて、毎年銀四萬リアル
(Real)の收入ありといふ。

メワリ市の記載

それより航行を急ぎてメワリ(Mewari)に達せり。此地にては四人の海員及日本の通譯上陸の許可を得たり。市は山地
に在り。其周圍には快き牧場ありて米穀を産す。梅樹甚だ多し。其果實を貯藏して之を日本各地に送る。飲料茶の中
に用ふるなり。住民は恐らくは従前曾て蘭人を見たるこゝあるまじければ、今彼等を見て非常に珍らしがれり。

メワリに殿堂十六字あり。蘭人中には通譯に請ひて殿堂を見んミ欲せし者もありしが、便宜悪しかりき。當日は死せ
る人の靈魂を祭る日なればなり。全市は頗る忙しく、人々艶装して、偶像を市外なる近親の墳墓に運出し、此處にて偶

像を下して、老若こもに俯伏して之を拜す。而して阿彌陀、釋迦、及他の神(各人禮拜する神を有す)が死せる友人の靈魂に慈悲を垂れ給はんこを祈念す。彼等が悪事を行ひて死せる者と共に、地獄の熱湯の中に呵責を受くるやうの事無く、永久の福地に伴はれて其處に居るを得んが爲なり。又彼等は死者の魂は死後數年間墳墓の邊に低回し居るもの信ぜり。

此死者の爲に祈禱する務は、大抵は青年市外に於て之を行ふ。其終りたる時は各人偶像を捧けて、行列の體をなし、陸續として市内に歸る。其途次彼等は獨語する様、恰も彼等と共に歩行する一の靈魂ありて之に眞面目の談話を交ふるが如し。彼等は家に歸るまで之を續け、家にては靈魂の爲に諸種の美味を調ふ。食物を盛りたる皿をば或者は庇の下、或者は屋上に置き、半時間程放置したる後、内に入れて安全に藏貯し、然る後青年は叫びつつ木の枝を以て空を打ちながら市外に出づ。此は死者の靈魂を墳墓に追還す爲なり。それより休憩して家に歸り、終夜各種の逸樂をなす。此方法は處によりて差違あり。投石して靈魂を墓地に追還るこは既に述べたり。

マツリには王の宮廷あり。之に接して後宮あり、多數の婢妾を住せしむ。夕方四人の蘭人及通譯歸りたれば出帆す。島嶼の間をビンガ(Binga備後?)に進めり。ビンガは美しき市にして、多くの樓閣、殿堂見ゆ。夕方シノヤ(Sinoya鹽屋)島に向ひ、朝ヒビ(Fibi)を見たる時しも、北風起りて南方に吹流され、マルガン(Margan)岩の近くまで来れり。岩は海上に突出し、上には邑あり、其下には岩を切りて風に對する安全なる港を作れり。使節は此處に投錨し、風波の和くを見て出帆したれども、ヒビより先に進む能はざりしが、夜に入りてダサキ(Dasaki)に達せり。風又起りしかも、翌日は牛窟(Ousimata)に着し、オタ(Wota)に渡り、一夜投錨して朝拔錨、室の前の堤防に着せしが、此處にて座礁せり。若し風が海岸より吹かざりしならば、難破を免れざりしならん。漸く滿帆を張り之を脱れしが、それよりは水深

き海に出づる爲に繪島(Cesima)に向ふを以て可きと判断したり。繪島には警標あり、二十四年前に立てられしものなり。通譯の言によれば當時は豊後及四國の兩島エムペロールに叛き、日本土佐の間の海上は叛民の劫掠の爲に危険となりたり。是に於て島民は警標より船を見るや、夜間は火光を放ち晝間は煙を揚げて、直に之を本州に通知したり。此報を得たる人々は直に海岸を防衛し、多數の兵士を載せたる船を出したり。此時より以降彼等は天候悪しき時、又はエムペロールの怒を招きたるもの脱走する時には、警標を用ひて之を報ずるの習慣を守り居れり。此くの如き場合には一定の合圖あり、脱走者自身には首尾よく脱出し得たりと信じて逃れて或港灣に入るこも、よく身を全くし得るこもは稀なり。そは豊後(九州)、土佐(四國)、及日本本土の海岸、下關、大阪間には多數の島あり、其島には孰れも警標ありて、一警標毎に二人の士絶えず監視警戒するが故なり。此番人は一日に三シリングを得。

鹽屋の眺望

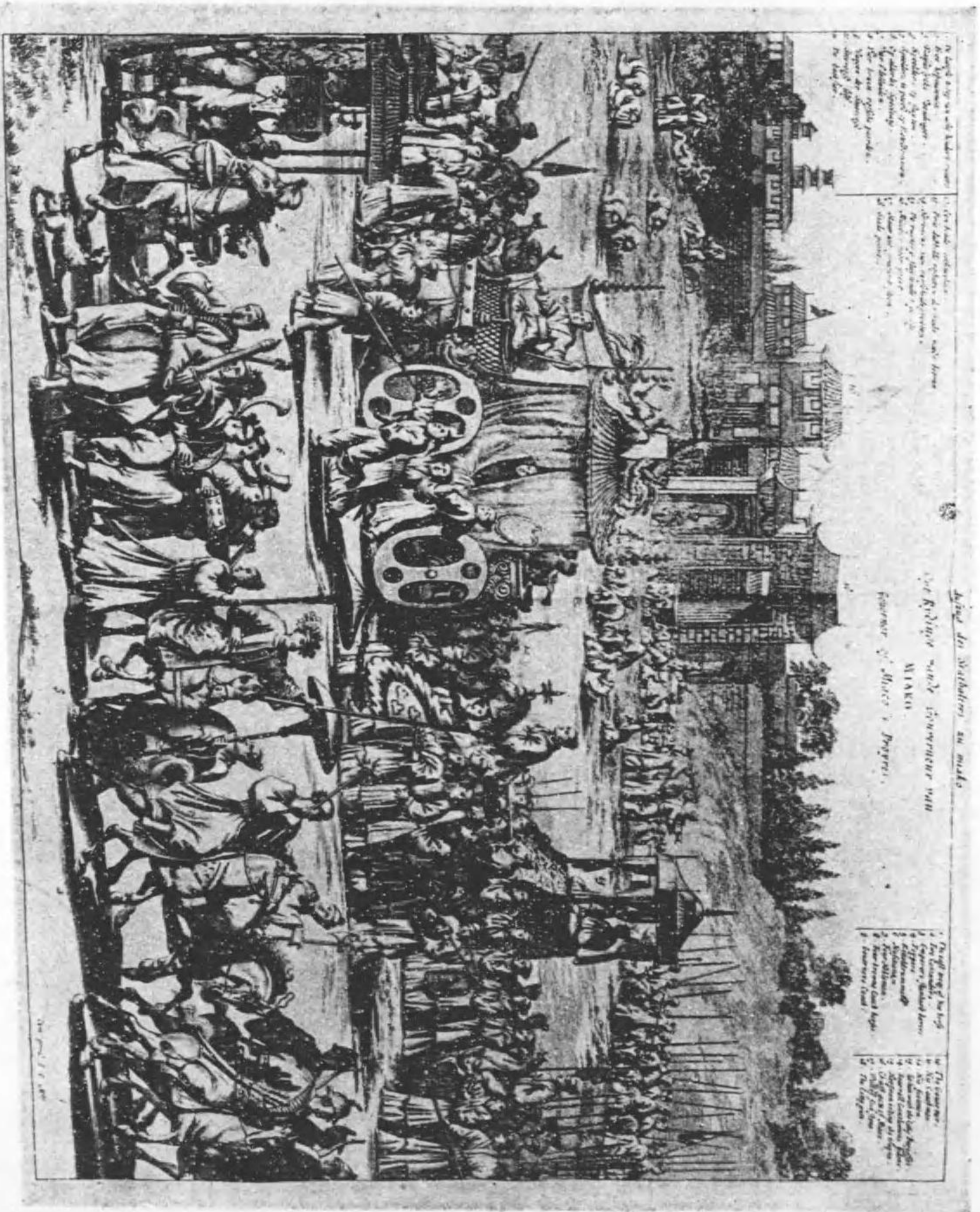
蘭使は繪島を去りし後、針路を東に取り、鹽屋の港を洗へる港に投錨せり。此地に上陸したるに、彼は其風土の快適なるを見て、世界中何處にも斯くの如き良地なしと思ふ程なり。羅馬人はカプアを推稱し、希臘人はテッサリアのテンペを激賞せりも、此等は到底此鹽屋に及ぶべきに非ず。此地南は大洋に洗はれて便利なる港をなし、北風に對しては高き海岸あり、東には堺の岬出で、西は大なる土佐島あり、南岸には高き岩ありて、南風海岸に吹くこも激浪を防ぐに足る。加之市の周圍は草木繁茂して之を飾り、風光絶佳なり。或處には山ありて茂林之を蔽ひ、他には谿谷ありて各種の植物多し、田野は耕され、牧場には牛羊群をなせり。鹽屋の町も家竝良く、倉庫も多し。倉庫には各地の産物集り、之を大阪、堺、都、其他の商業地に輸出す。ゼルデレンは此地にて鹿の皮を荷卸しせり。或者は此地より明石を見に行けり。明石は近き頃起りし震災の爲に市の半破壊し、慘狀を呈し居れり。此地より遠からぬ處に硫黄

の燃ゆる山あり。其地下の火氣外に破裂して之が爲に同市は害を被れるなり。エムペロル東照宮様は市を再興せしめんじて、資金を下賜せられたり。

蘭使は鹽屋港を去りて、兵庫より着弾距離を航海し、堺に赴かんせしが、風東北より起りて淡路に吹流されたり。此處にても亦危険に遇ひ、若し風の西北より來らざりしならば、岩に觸れて難破を免れざりしならん、それより滿帆を揚げて堺の方に航走し、同地に投錨せり。市は美麗なるのみならず、古色ありて、堅壁を以て圍まれたり。日本エムペロルは此地に監督官を配置し、城壁の破損あるや直に之を修繕せしむ。此地に碇泊中、蘭使ゼルデレンは海岸に散策の間、一日本人が頸部、兩脚及腹邊に大石を結付けて水中に飛入り、宗法の名譽の爲に自ら溺死せるを目撃したり。其屍を引揚げて收めし船は直に焼却せられしが、此は同船が復び世俗の用をなさらんが爲にて、敬虔の餘に出でしなり。

都に於ける蘭使の迎接

蘭人は航海を急ぎて大阪を過ぎ、都近くの地に碇泊し、それより彼は盛儀を以て市内に嚮導せられたり。第一に來りしは八百人の騎士にして、能く訓練せられたる馬に跨り、凡て弓矢を滿載せる簾、長槍、劍二口、大ナイフ、兜及び本人のタイビエ(Taepies足袋?)を稱する蠟塗の半長靴を以て武裝せり。其背後には二人の日本官吏來る。相並びて馬に騎せり。次にエムペロルの旗を捧ぐる者來る。其旗は金銀の刺繡の上に圓き〇字及尖りたる星五個を現し、〇字の下には半月と蝸牛の角と三個の星及トクサンベニング(Tokangpening)の花あるものなり。次には七人の笛手、六人の喇叭手來り、之に次ぐは七人の馬上鼗鼓を打つ者なり。次には大なる天蓋四人の支持者にて運ばれ、其下にはエムペロル及都の紋章を胸の前、馬の頸に持つものあり。次には奏樂隊にして各種の樂器を奏せり。最後に打たせたるは市



都の奉迎の行列

の奉行にして、高價なる車に乗れり。其車輪は蠟塗鍍金したるものにて、徐々に行進せり。車輪の間には大なる卵形の孔及小き孔あり。帳は華麗にして花模様の絹なり。其頂には二個の鍍金せる龍あり、龍は前足を以て紋章を保持せり。四隅は倒置せる盃を以て飾れり。御者は左手にて一端に鍍金の星を有する鎗を持ち、右手には車軸の四孔を通せる四本の手綱を持ち、主は花模様の絹を以て蔽へる方形の席の上に、足を屈して座せり。馬車の背後には三人の樂師あり。兩側には數人の僕扇を携へて行く。馬車を牽ける四頭の馬は身分ある人に導かれたり。奉行は時々帳の間より顔を出して外を見る。彼を見る人々は面を地につけて俯伏す。馬車の後には直に護衛の兵士續く。其半數は槍を持ち、半數は銃を持ち。之に繼ぐものは一人の商人なり。その身は華麗の服を着け、其乗馬は頭に羽毛の飾を附く。彼の次には稍距離をおきて輿來る。十四人の紳士之を昇けり。兩側に七人づつ輿に定着せる長き棒を肩にして運ぶ、此高座は五級の階段を有し、方形の上に在り。各隅は巧に振りたる柱に支へられ、其柱の周りには何れも絹の帳を括り、屋根も絹にて作り、總を以て飾れり。此輿には都の上長官二名乗れり。之に次けるは普通の輿數臺にして、貴族等乗れり。最後なるは諸種の馬上隊なり。蘭使は此盛なる行列に迎へられて、市の方に騎り行けり。

都の記載

都の第一門は三箇の入口を有す。中央のもの最も大にして、砂石の壁の間に立つ。内門は一階建にして、其屋背より市の紋章を有する旗翻れり。都は日本人又之を呼びてカブコマ(Cabucoma)又はコカイ(Coquay)といふ。以前は周圍二十一哩なりしが、内亂によりて三分の一を減ぜり。現今八萬の家を有し、上下の兩半に分つ、下半は伏見まで廣がる。上の都にはダイロは公卿と共に壯大なる宮廷を有せり。ダイロ其人は鬚を剃らず爪を剪らず。又市内には五個の大學あり。都の附近にも尙五個の自由學校あり。即ち高野(Coja)、根來(Wegru)、比叡山(Franzon)、ホミ

(Homi)・バンツ(Bandu)是なり。各三千五百の學生を有す。教ふる課目は修辭學、雄辯術、歴史編纂學、天文學、詩及算術なり。

都を距るこち遠からず比叡山(Frenojamma)高く雲表に聳ゆ。

ペーテル・ダヴィチー(Peter Davity)の談によれば、越中の國に不斷燃ゆる一奇山あり。

都の湖水には「ブーア・ジャック」に似たる魚あり。日本人は之を乾して各地に送る。ペーテル・ダヴィチーは佛王ルイ十三世が此魚を味ひしこゝを記せり。

日本には多くの地に砂石を以て作れる墳墓あり。高さ二尺許り、中空にして、死者の友人は水及生米を之に入る。貧民又は鳥之を持ち去る。又花或は木の枝を墳に散す。

都にては太閤様の建てたる宮殿甚だ美なり。其處には金を以て刺繡せる千枚の絨緞懸れり。宮殿の前に廣濶なる中庭あり。其中央に劇場ありて、悲劇及喜劇演ぜらる。其兩側に四個の四層樓あり、家屋は木造なれども美觀なり。

日本人は夜間失火の際には火災の起れる街路に對して自ら之を救はざるべからざるの命令を受け居れり。何となれば何人も之を助くる爲に來るもの無ければなり。之が爲に類焼するこゝろ甚だ多し。

日本の度量衡

都に商業盛なるが、其秩序は歐洲に於けるよりも良好なり。何となれば凡ての諸侯は皆同一の度量衡を有し、濕貨、乾貨に對して通用す。其尺度は一間(Chin)を稱せられ、ラインランドの六尺に相當す。之を六の大なる部分及び六十の小なる部分に分つ。此間より一尺(Spach)を稱する尺度を作る。正しく一間の六分の一なり。……凡ての店員は此尺度を用ふるこゝなるが、精確にして毫髮だにも差ふこゝなし。

日本の街路

日本の凡ての街路は市に於ても村に於ても同じ長さなり。即ち一街は六十間(60Chin)、即ちラインランドの三十ロッドなり。六十街は日本の一里を作る。即ち一千八百ロッドなり。大道には一里、こゝに小き圓丘あり。里數を示す目的にて人の設けたるものにして、是に四本の高き木を植ゑたり。此は旅行者に大なる案内及助をなす。

日本の重量は尺度の如く精確なり。……

日本の貨幣

貨幣も亦同じく秩序あり。造幣局長は金銀又は銅の金錢を作らず。商人は鑛山の農夫の許に行きて、地金の金塊を成るべく廉價に買ひ、之をエムペロルの命令に従ひて精確なる重量に作る。次で彼は之をエムペロルの造幣局の吏員に渡す。吏員は一定の日に集りて、提出せられたる金銀の重量の十分なるや否やを衡る。而してそれが僅々半グレインにても不足の時には、中央より切斷して提出者に還附す。定量のものは官吏之に極印を打つ。之を打ちたる後再び之を衡る。極印は金錢の重量に缺くる所なきを示すものなれども、猶そのみにては通過せず。是に於て商人は自身提出の金銀が混合したるものに非ずして眞の金屬なるや否やの試験を受くるが爲には、其目的の爲に任命せられたる官吏に更に提出せざるべからず。此官吏は聊にても混合物あり見れば、之を中斷して所有者に還附す。然れども此試験に堪ふれば、其金は造幣局長の處に送られ、局長等は再び之を衡りて貨幣とし、然る後に支拂を受くるを得。金錢若し餘りに輕き時は、之を受取る者無く、又支拂をなす者無し。之を犯す者は財産全部を沒收せらる。

日本の商賣法

日本人の金錢支拂は奇なり。多額の金銀を貯ふる者は、之を計算し又は之を見るこゝ無くして請取るの習慣行はる。

造幣局長は紙にて二百ポンドの金を包む。斯くて封緘せられたる上は、何等の疑問もなく民間に通用す。彼等は又小き木箱の中に金貨の紙包二十を容れ、人の提ぐるに適するものを用ふ。一個の箱に納るる額は四千ポンドなり。同様の箱は銀にも用ひらる。但し箱の作り方はやや異なりて、千二百クラウンを容れ、鑄造者の印を捺す。此盲目的の支拂ひ方につきて何の詐偽も起らざるは、奇と謂ふべからずや。

日本人は唯三種の金貨を有す。大なるは六十クラウン、第二は八クラウン、第三は二クラウンの價なり。銀は衡量せられ且貨幣に作らるれども、一定の價なし。造幣者は小き包にして六十クラウンの格價に集む。銅貨は中央に方形の孔あり、之に糸を串通す。其數個を括りて一般人民の間に普通の物の價として通用す。

日本の極東部にては金貨の外には物貨の價として通用するもの無し。然れども長崎に於ては外國商人の間には大抵銀を通用す。金はエムペロルの命令により國外に輸出するを得ざればなり。葡人の忌まれし理由は彼等が多額の金を輸出したるが故なり。

パウロママ山の記載

蘭使一行は都を出でて比叡山の麓を旅行し、大津を経て長さ十八リーグの大湖の邊に在る膳所に達せり。此湖水は都を流れて大阪に注ぐ河の源をなす。ゼルデレンは膳所に於てパウロママ (Pauomama) と稱する面白き山を見んむ欲せり。膳所より東北東に當り、かの湖水に近し。彼は二本の橋を備へ每橋に方形の帆を擧げたる立派なる舟に乘れり。風によりて帆走する時、日本人は廣き權を以て漕けり。船首には錨二個あり、船の中央には四本の柱に安んずる方形の臺あり。其臺を通して主橋立てり。臺の四側は鍍金の文様を以て飾れり。臺の頂に於て日本の海員は主帆を操れり。其下に蘭使は露頂にて座し、兩側には日本人扇を携へて座せり。此船の前には日本の小舟漕ぎ行けり。舟中に

ては蘭人の部下喇叭を吹けり。二三時間にして彼等は皆共にパウロママ山に到着せり。同地には數隻の船、橋頭に旗を翻して投錨し居れり。山の麓には海岸に美なる門あり、兩側に於て方形の柱を以て支へらる。其門は中央に於て開けり。砂石の壁、水際を近く走りて長官の宅の防禦をなせり。遠くよりは山の影となりて見えざる部分あれども壯麗なり。その近くには紳士の邸宅及下民の家屋なごあり。皆前記の壁に圍まる。

山は峻峻にして高し。然れども多くの凸處を有し、之に沿ひて曲れる階段ありて頂上に達す。頂上には佛僧の住む殿堂ありて、多くの都市即ち石部 (Izbe)、水口 (Minacutz)、シンツサヤ (Zintzanna)、草津 (Cusatz)、タモニズ (Tanoniz)、膳所 (Dose)、大津、都、伏見、淀、牧方、ウハツ (Uhas)、稻荷 (Yinari)、ミカワ (Micawa)、其他多くの地を遠望し得べし。此殿堂は長官の邸の間にエムペロルの兵士の宅數個ありて、岬に立てり。右側には山腹に長官の珍奇なる庭園あり、其園内の樹木は數層をなして栽ゑられて湖水に映す。庭園の中央には壯麗なる饗宴館あり。左側にては山は湖水に向ひて傾斜し、農夫の住む家四軒あり。又山には樹木繁りて、世界にも斯くの如き愉快の地は稀なり。蘭使は此處にて日本風の贅澤なる饗應を受けたり。此地方の人は非常に寛大なり。

奇なる偶像トパン

ゼルデレンは江戸への旅行を續けしが、日本人の通譯は途上多くの談話を以て彼等を楽しませしめれば、旅行は短きが如く覺えたり。其話の中に次の如きものあり。彼は嘗て偶像トパン (Topan) の殿堂を見たることあり。該像は雲形の如く鑄られたる銅の香案の上に立てり。武人の如き装をなし、頭に兜を戴き、手に大なる棒を握りたるが、天を翔りて棒を振り、雷を起さんとするもの如くなりき。若し雷鳴ある時は、神聖なる樹葉を以て頭を飾れる一佛僧來りて、之に數種の魚を獻す。その神聖なる樹葉は雷の害を受くること無からしむるものなりき。

此話に通譯は他の話を加へたり。曰く、昔豊後島(九州)は日本の本州の海岸に接續して、人は小倉より下關に歩行することを得たり。其頃數人の賊ありて、佛(Fofoeme)の殿堂より黄金の像を奪ひたるが、此行爲は佛をして激怒せしめたり。賊は小倉の附近に住し、像を其巢窟に隠し置きしが爲に、兇行者は誰とも知れざりき。佛は之を恥辱しして、豊後を日本本土の海岸より割き、其間の土地を嚙下せり。是より後日本と土佐四國との間の海は朝鮮海に連續せり。かかる中にも佛は己が像に注意すること大にして、純金なれども之を木の如くに海に浮ばしめて、メトガモナ(Metogamona)島に運び、此地に着陸せしめ、之を引揚げて殿堂を作らしめ、今日まで崇拜せられ居れり。

日本通譯の奇談

メトガモナより遠からず(通譯の話)一の高山ありて、ムコ(Mooko)島と相對す。山上には數箇の殿堂あり、遙に海上より望むべし。此等の殿堂内にて佛僧は偉大なる神を禮拜す。此大神は日月星辰を創造せしのみならず、尙十五の小き神を作れり。此諸神は其後地球の事に就きて會談せり。第一位の神は代理の神をして眞鍮の卵を作らしめ、其中に地水火風の四大と赤黄青緑の四原色を包ましめたり、四大と四色とは調合せられて此卵より出で、此見るべき世界は現れたり。世界は斯くの如くにして創造せられたれき、人は無し。其後久しからずして一人の女カラバッシュの貝の中に發生したれき、猶靈魂無し。主宰神は之を憐み、牡犢を貝の處に來らしめ、此牡犢がカラバッシュの貝に吹きかけたる鼻息は生長したる女の靈魂となれり。女は貝より出でて、低級の神と親しみ、是より人間は多數となりしのみならず、悪事をも亦増したり。其後人間は愈々その天來の素性は異なるものとなりて次第に悪化し、雷、虹、及火を嘲罵し、遂に大神をも誹毀するに至れり(大神の名を呼びたる時、通譯は頭を下けたり)。是に於て大神は低級の神を身近

く集めて語るやうは、彼は凡てのものを破壊し、日月星辰を天空より拋出し、空氣と水とを混和して一の圓球を作り、その中に於て四原色を凡て元形に復せしむべき決心なりと語り。殊に彼は偶像トバンに命じて空中を射、凡ての王國を電火にて焼くべき爲に雷を作らしめたり。此命令を發するに共に其事は實現せられて、全世界は廢物の堆積となり、唯一人其家族のみこの外は何物も救はれざりき。此人は諸神を尊崇せしものなり。主宰神は總破壊の際に此罪なき一家に注意し、彼等を深き洞穴に閉込め、其前には大なる貝を置き、水をして洞穴中に流入せざらしめたり。

此話を聽きては、遠地の異教徒も暗にアダムの淪落と洪水を認容せることを感ぜざる者無からん。通譯は葡、西、英、蘭等の諸國人も此洞穴の中に救はれたる人より出でたるものと考へ居れり。

觀音の像が海を其各自の領域に退かしめ、トバンは四方に散じたる雷電を集收せし時、此有徳の人は洞穴より出でてクエラン(Koejlang)國に定住し、多數の子を生みしが、此子は互に結婚して其一族を増加せり。然れども此等の子孫の急に増殖せし時、天に歸ることを命ぜられたりし諸神は、再び地上に歸りて人々親しむべき許可を主宰神に請へり。此請は神より許可せられたれば、彼等は愉快なる森に下り、如何にして鹿肉を得べきかを相談せし時、クエラン(Koejlang)の住民は鳩首して語るやう、此等は我が祖先を溺死せしめたる神々なり。此くの如き大罪を復讐せん云ひて、之を實行すべき最善の方法を求めし後、森林の各處を焼くを以て最も捷速なりと考へ、二三時間の中に凡ての樹木を焼けり。諸神の中或は焔を免れんせしものもありしかば、森を圍める人々の爲に寸断せられ、他のものは焼かれたり。其中七神は天に昇りて下民の恕すべからざる罪惡を主宰神に訴へたり。大神は甚しく怒りて、直に一天使に命ずるに其罪を罰すべきを以てせり。天使は直に下りて、罪人をクエランより地獄の熱湯に追ひ、彼等は今日に至るまで少しも假借なく又間斷なく呵責を受けつつありき。(以上通譯の談。)

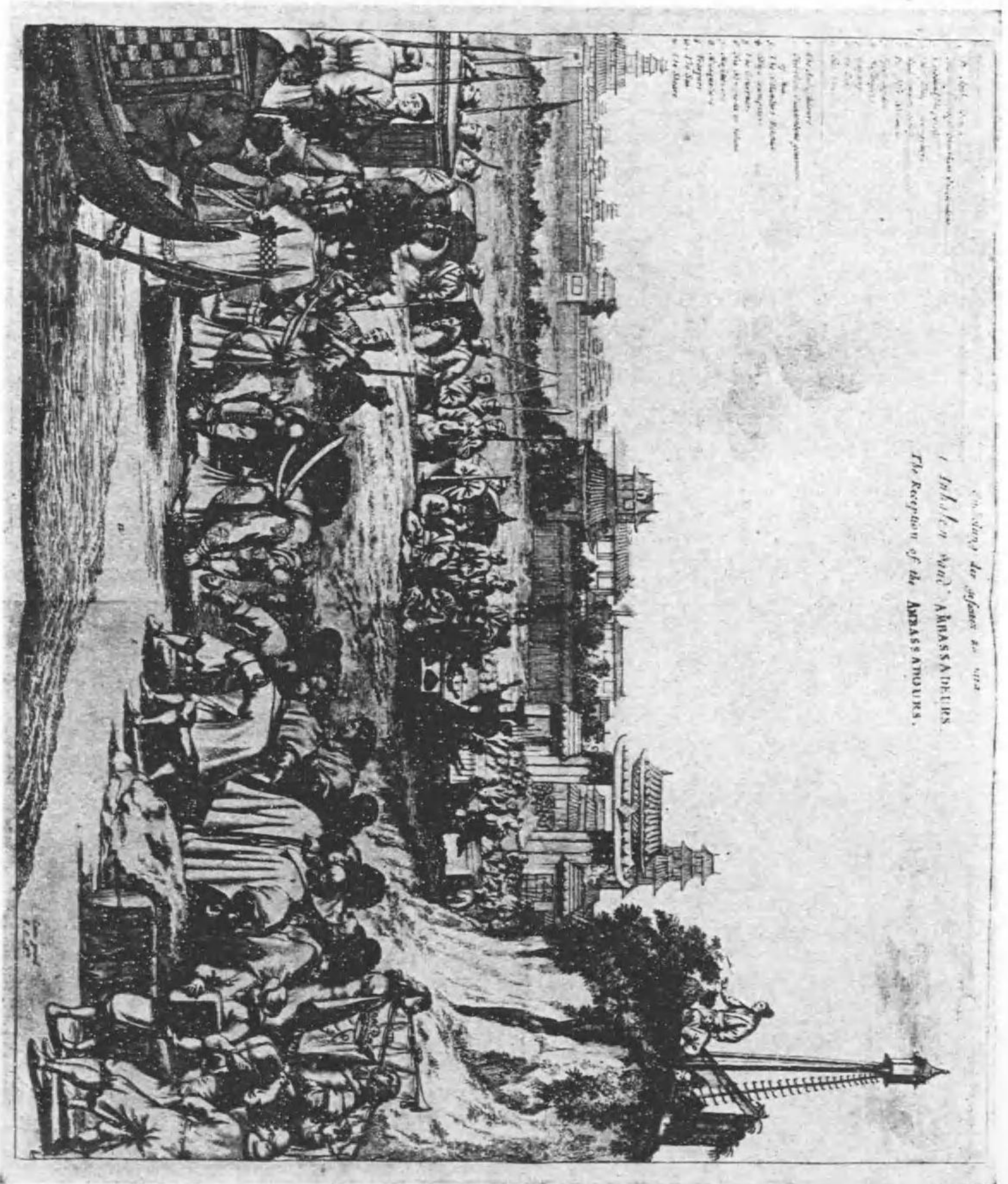
蘭使の官驛に於ける迎接

さる程に蘭使は旅行を續けて桑名より宮に渡り、エムペロルの獻品を陸揚し終るや、宮の地方官は多人數の行列を以て市より出でて一行を迎へ導きたり。市門の外には横木を渡せる柱に多くの銅盤を懸け、日本人は之を打ちて大なる音響を出せり。又數臺の乗物は水際の方に運ばれ、一臺ごみに多數の兵士を以て護衛せり。高き岩の麓には使節の伴へる四人の喇叭手直に「レウウィット」(Leu Witt)を吹奏せり。地方官オビルハム・ギアント殿(Obiham Giantodon)は使節を見るや輿中より出でて彼を迎へ、日本風に地まで體を屈せり。背後には護衛兵の銃を持つ者又槍及劍を持つ者數人ありたり。終に使節は江戸に達し、暫時滞在して使命を終へて、再び長崎に歸るの許可を得たり。

* * * * *

長崎に歸りて彼は例の如く物品の販賣をなせり。販賣日には商人集りて、蘭人の貨物を買はんミ欲する價格を互に知られざる様に巻紙に書く。之をボンヨイスに渡せば、彼は之を開きて最高の價を附したる者に貨物を渡す。是れ終れば、直に金錢の授受となる。錢は或は銀餅又は封印せられたる銀の紙包を以て拂はる。此間の取引は正直にて、詐偽の行はるるこみなし。若し詐偽を行へば、之を行へる者のみならず、家族及隣人二十人、即ち左右側より五人づつ、向側より十人、皆死刑となるべし。

貨物の積卸には常に多數の労働者を使用す、彼等は出島の蘭人の倉庫の前に来る。出島にてボンヨイスは東印度會社の紋章を附したる木札を必要なる數だけ窓より投ず。群集が一片の木札を得んミて争ふの狀面白し。拳闘、角力、其他凡ての腕力を揮ふこみは自由となり居れり。木札を得たるものは之を帶に結附けてボンヨイスに示すに、其後彼は一定の賃銀を得て労働すべき命令を得。



蘭使の官驛

長崎より出航する船舶

十月にはバタヴィアに赴き、それより和蘭に行くべき船長崎を出發す。之に次ぎてはマラッカ、スラット、コルマन्दル、其他印度の海岸に航海するもの抜錨す。

*

*

*

*

*

*

*

結末

以上日本帝國の現状、富力及壯麗を記し來りたるが、是れ新バタヴィアに在る和蘭東印度會社の諸使節の記事に材料を探り、此島に關する最も十分なる最も新しき觀察にして、此著の出づる三年前までの記事を網羅せるなり。惟ふに此記事は長きに互れりし雖も、讀者の倦怠を招くこと無かるべし。其記事の變化あり又珍奇なる此くの如きは、未だ曾て英人の耳に達せざるものなりと信す。此著若し世に歡迎せられんには、之に氣を得て支那大陸に關する著作を出さんご欲す。それには新奇の記事は滿載せらるべく、前者よりも一層多數の繪畫を挿入すべし。

(終り)

大正十四年三月二十一日印刷
大正十四年三月二十五日發行

モンタヌス日本誌

定價金七圓

譯者 和田萬吉

發行者 高島米峰
東京市小石川區原町六番地

印刷者 柴山則常
東京市本郷區駒込林町一七二番地

印刷所 會社 杏林舍
東京市本郷區駒込林町一七二番地



發行所

東京市小石川區原町六番地
電話小石川一八八番
振替口座東京一五六八六番

丙午出版社

137R-25

文學博士 和田萬吉先生校訂
馬琴日記
定價 金參圓
送料 金拾貳錢

文學博士 和田萬吉先生著
圖書館管理法大綱
定價 壹圓八拾錢
送料 拾錢

和田萬吉博士 植松安學士 共編
今澤慈海學士 村島靖雄學士
增訂圖書館小識
定價 貳圓
送料 拾貳錢

文學博士 和田萬吉先生著
圖書館學
(近刊)

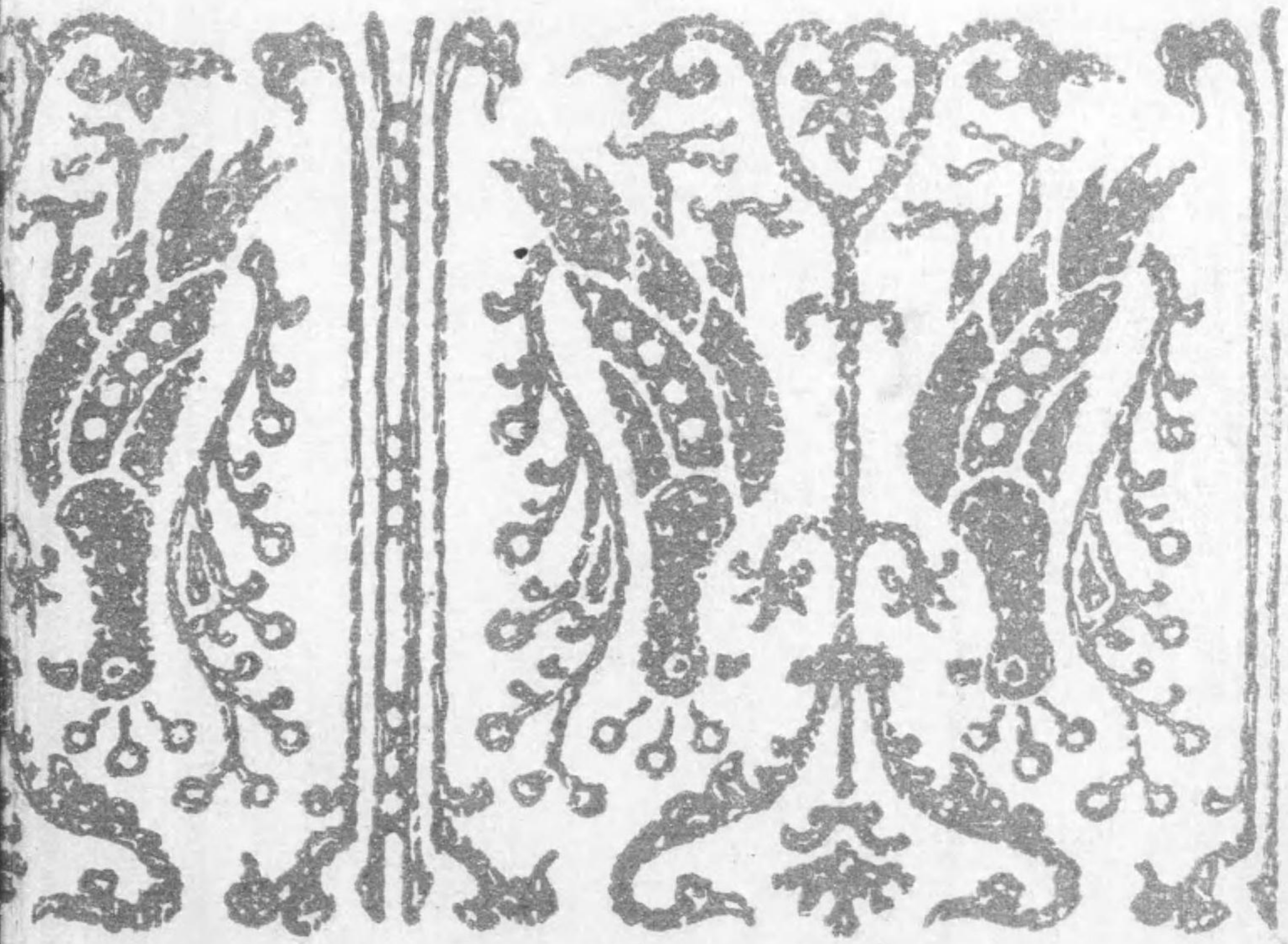
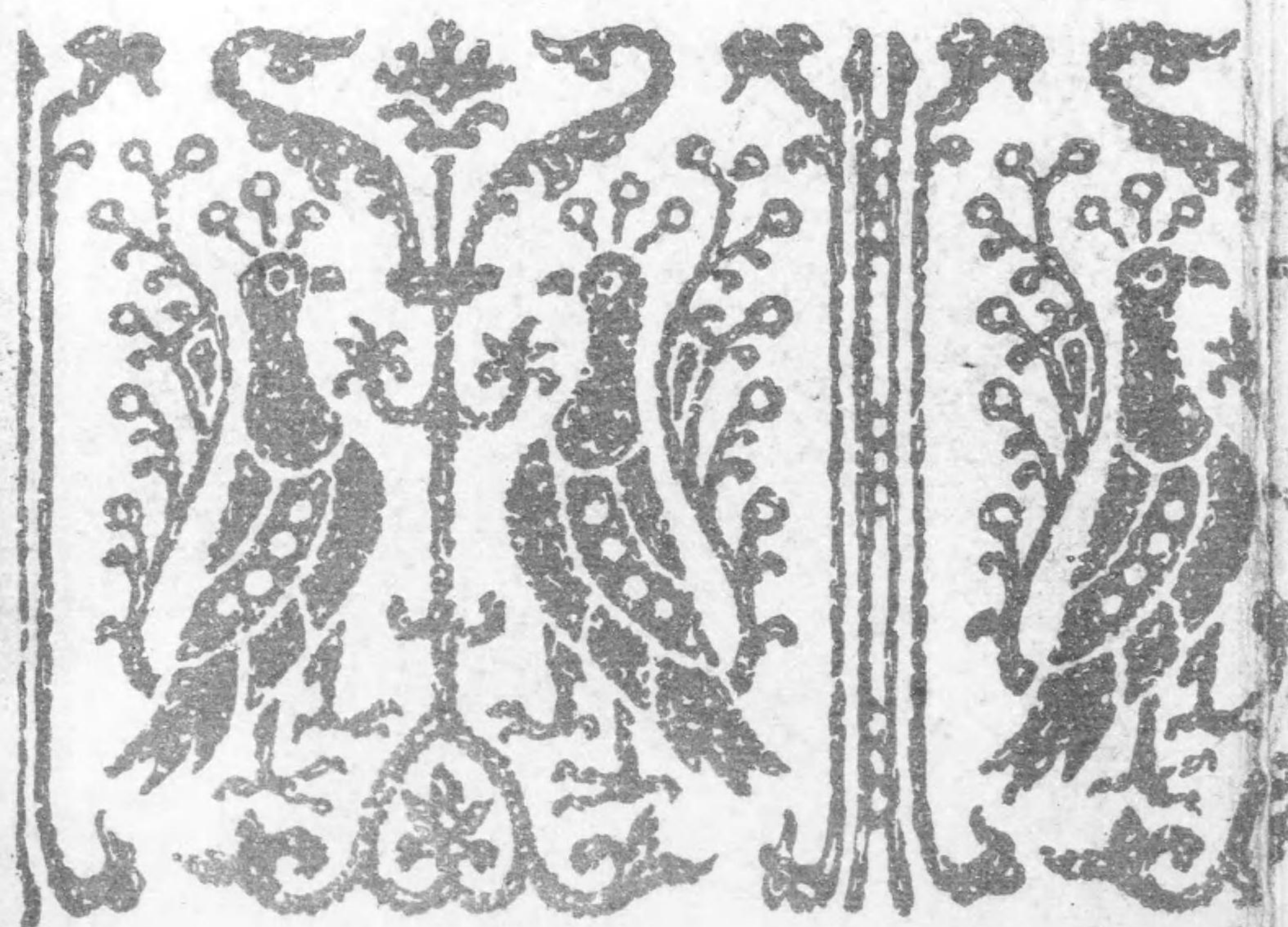
これ不世出の文豪曲亭馬琴が飾らす偽らざる實生活の告白なり彼が規律正しき起居、綿密なる家政、拙速よりも巧選を費へる著作、出版書肆に對する應接、病弱なる妻子の介護、敬神崇佛の行跡、家祖の奉祀薪炭米鹽の購入、家法賣藥の製造、親縁故舊の音問、下女の出入、奉祀園果實の拂下、さては鼠の跋扈、犬の闖入に至るまで凡そ自家に起りたる出來事は毫末も遺すところなく加ふるに見聞の世事、天災地變の類、録して頗る詳密を極む

年額僅に五百圓前後の經費を支出し得る底のものまでをも數へて尙且つその數七百に充たざるのみならずその管理の方法宜しきを得ざるがために十分の効果を收め得ざる日本の圖書館事業を以てこれを歐米のそれに比し來る時世界五大強國の一たる日本の文化も亦慙殺に値するを見る今圖書館學に於て日本唯一最高の權威者たる和田博士夙にこれを憂へて此の書を成す蓋し斯界無二の寶典たり

研究者の自由講座として學校教育の色場場として社會教化の常設館として圖書館の任務は次第に重きを加へ來れりた、邦人の圖書館に關する理解甚だ乏しくこれを利用して知識を求め文藝を樂むといふが如き未だ民衆に徹底せざるを憾みとなすこれ或は事にこれに従ふ人々のその經營設備指導宣傳等に關する用意の十分ならざるに基くにはあらざるなきか本書はかかる缺陷を補はむがために編述せられたるもの

日本に於ける圖書館學の最高權威者たる和田博士が多年東京帝國大學に於て新に系統を立て、講述せられたる圖書館學の稿本を訂補潤色して發表せられたるものにして本邦唯一の新著なり此人にして此著あり如何なる讚辭も何等の用をなさざるなり

128R-26



終

